

高齢者の世帯構成による社会関係の比較

－ひとり暮らし高齢者に着目して－

石 塚 優

高齢者の世帯構成による社会関係の比較

—ひとり暮らし高齢者に着目して—

石塚 優

目次

はじめに—問題意識と仮説、調査の概要

1 調査の手続き

2 図表を読む際の留意事項

3 対象者の基本属性

I 年齢区分で見る世帯構成の変化

II 生活上の困難や重要なこと

1 生活上の困りごとや悩み

2 日常生活を安心して送るために重要なこと

III 近隣との付き合いと友人数

1 近所の人との付き合い方

2 友人数

3 近所の人との相互支援

IV 家族との関係と参加団体

1 家族との関係

2 活動への参加

IV 仮説の検討と今後の課題

引用・参考文献

【要旨】

一人暮らし高齢者の閉じこもりや孤立を念頭に、他の世帯と社会関係を比較した。他の世帯と比べた結果は、生活満足度が高く、困り事も少ない。近所の人との付き合いはむしろ活発で親密であるが、近隣との相互の支援や地域の活動への参加が少ない。家族が遠方に居住し困った時の手助けが期待できない等である。女性が多くを占め、課題は困った時の手助けや緊急時の支援と、少数派であるが孤立や閉じこもりへの留意が必要である。

【キーワード】

世帯構成(households type)、社会関係(social relations)、独居(living alone)、社会的孤立(social isolation)、孤独(loneliness)、重要な他者(significant others)、近所の人との相互支援(mutual aid of residents in the residential area)

はじめに－問題意識と仮説、調査の概要

近年の都市の中心市街地や商店街、小売店の変貌や衰退は郊外に多数の大規模店・量販店が出店したことによる生活の郊外化が一因である。この生活の郊外化は自動車を利用出来ることで成立し、徒歩でも行ける小売店や商店街がこのために閉店するなどの事態に至っている。これにともない、自動車を利用できない高齢者などは日用品・食料品の買物にも支障をきたすなどの事態になっている。この点を踏まえて一昨年度、昨年度と坂道や階段の多い地域に居住する高齢者を対象に調査を実施し、「斜面地居住高齢者の生活問題－距離と社会関係に視点を置いた生活問題」（関門地域研究 18、2009）、「斜面地に居住する高齢者の日常生活の問題と社会関係に関する調査」（同 19、2010）として報告書にまとめた。

この調査により、以下の①～④のことが明らかになった。①坂道や階段の多い地域に居住する高齢者は日用品や食料品の買物では距離と時間に支障がある（④とも関連する移動手段の問題）。②近所の人との関係は他の地域と比較して特に親密なわけではない。③相互の助け合いが他の地域と比較しても特に活発に行われているわけではない（ただし、相互の手助けの必要性は社会関係とは独立して無関係に起こる事象のため、近所の人同士が親密でも必ずしも活発に手助けが行われるとは限らないことは留意を要する）。④転居するならスーパーマーケットが近いことが条件として多い。

08年度の調査結果からは以上のような点が問題として明らかになったが、09年度は調査地点を変えて、主要な問題である買物や通院などの前年度の調査に地域活動や近所の人との付き合い、家族からの支援などを加えて調査を行った。仮定（仮説）は、上記の08年調査から得られた結果を仮説として、さらに社会関係が他の地域と大差がないのであれば、家族との関係は密である。生き方に信念がある等である。また、町内会自治会活動を行っている人やその経緯についても質問した。調査の方法や対象は以下の調査の手続きに記述した通りである。調査の時期の都合により上記の09年度の調査報告（上記の関門地域研究 19）は単純集計結果を掲載するに止めた。対象者の多くは斜面地に居住しているが、その他の地域に居住する人も含んでいることから、この両者の比較や自家用車の有無による比較等の詳細は未報告である。

ここでは、09年度の調査資料から高齢者の世帯構成による比較を行った。仮説は、一人暮らし世帯（以下、一人暮らし）は夫婦のみ世帯（以下、夫婦のみ）や同居世帯に比べて、

- ①日常生活上の不便等の問題が多い
- ②閉じこもりがちで社会関係が少ない
- ③団体活動への参加が少ない

④家族との関係が密である等である。以下では一人暮らしの孤立や閉じこもりを念頭に、生活上の問題、近隣との関係、家族との関係、友人や仲間等の社会関係について一人暮らし世帯に着目して検討する。09年度調査の概要は以下の通りである。

1 調査の手続き

(1) 調査対象者及び対象者数

斜面地に居住する 65 歳以上の 1,165 人（全ての人が斜面地に居住するとは限らない）。

(2) 調査地点

北九州市八幡東区

(3) 調査期間

2010 年 2 月 6 日から 3 月 11 日。

(4) 調査方法

町内会自治会、校区社会福祉協議会、北九州市社会福祉協議会の協力により町内会自治会役員が対象者の自宅に配布し、回答後封筒に入れて封をした調査票を回収する留め置き法による。

(5) 回収率

調査票配布数 1,165

回収票数 1,057 回収率 90.7%

有効回収票数 1,051 有効回収率 90.2%

2 図表を読む際の留意事項

(1) 集計結果は数値で示し、単位は実数と百分率である。ただし、百分率の場合は少数第 2 位を四捨五入しているために、合計が 100.1%や 99.9%等になる場合もある。また、複数回答の合計は 100%を超える。表 1～3 は上段が実数、下段が百分率を示す。

(2) 集計結果では回答選択肢の文言を略記している場合もある。

3 対象者の基本属性

以下の検討の視点とする世帯構成は表 1 に示した。これを「一人暮らし」「夫婦のみ」「親・子・孫等同居世帯（以下、同居世帯）」にまとめ、「同居世帯」には表 1 の通り「親世代との二世世代家族」「子世代との二世世代家族」「親子孫の三世世代家族」「その他」を含めているが「無回答」は除外した。従って、以下の集計対象は「無回答」を除く 1,027 票である。

表 2 には世帯構成別の基本属性を示しているが、世帯構成は表 1 の通りにまとめた結果により示している。

これによると、性別では、「一人暮らし」は女性が 8 割以上と多く、男性は 2 割に満たない。「夫婦のみ」は男性が多く 6 割以上を占める。「同居世帯」は女性が約 6 割で、男性よりも多い。

年齢では「一人暮らし」は 75～79 歳が最も多く、70～74 歳、80 歳以上で減少する。「夫婦のみ」は 65～69 歳が最も多く、以降徐々に減少する。「同居世帯」も「夫婦のみ」同様に 65～69 歳が最も多く、以降徐々に減少するが、減少幅は「夫婦のみ」より小さい。

「居住年数」は世帯構成による違いは認められないが、20 年以上が 8 割以上である。

「斜面・階段の多少」は世帯構成により大差はないが、「夫婦のみ」「同居世帯」の約 7

割が「多い」と回答したのに比べて「一人暮らし」は6割であり、「夫婦のみ」「同居世帯」の方が斜面や階段が多い地域に住んでいる人が多少多いようである。

「自家用車の所有」は「一人暮らし」は「所有せず」が8割近く、「夫婦のみ」は「所有」が5割、「同居家族」は「所有」よりも「家族所有」が多く、4割以上を示している。「本人所有」と「家族所有」を合わせると「夫婦のみ」は約6割、「同居家族」は約8割の自家用車所有率になる。このように「夫婦のみ」「同居家族」に比べて「一人暮らし」は交通手段が不利であると推測される。

表1 世帯構成

世帯構成		世帯構成のまとめ	
一人暮らし	329	一人暮らし	329
	31.3		31.3
夫婦のみ	360	夫婦のみ	360
	34.3		34.3
親世代との二世世代家族	55	親・子・孫等同居世帯(以下、同居世帯)	338
	5.2		
子世代との二世世代家族	184		
	17.5		
親子孫の三世世代家族	66		32.2
	6.3		
その他	33		
	3.1		
無回答	24	無回答	24
	2.3		2.3
合計	1,051	合計	1,051
	100.0		100.0

表2 世帯構成別の基本属性

性別	合計	男性	女性	無回答
一人暮らし	329	61	268	—
	100.0	18.5	81.5	—
夫婦のみ	360	236	122	2
	100.0	65.6	33.9	0.6
同居世帯	338	133	205	—
	100.0	39.3	60.7	—

年齢	65～69 歳	70～74 歳	75～79 歳	80～84 歳	85 歳以上	その他	無回答
一人暮らし	47	71	89	72	47	2	1
	14.3	21.6	27.1	21.9	14.3	0.6	0.3
夫婦のみ	108	90	88	47	24	2	1
	30.0	25.0	24.4	13.1	6.7	0.6	0.3
同居世帯	74	71	64	57	55	17	—
	21.9	21.0	18.9	16.9	16.3	5.0	—

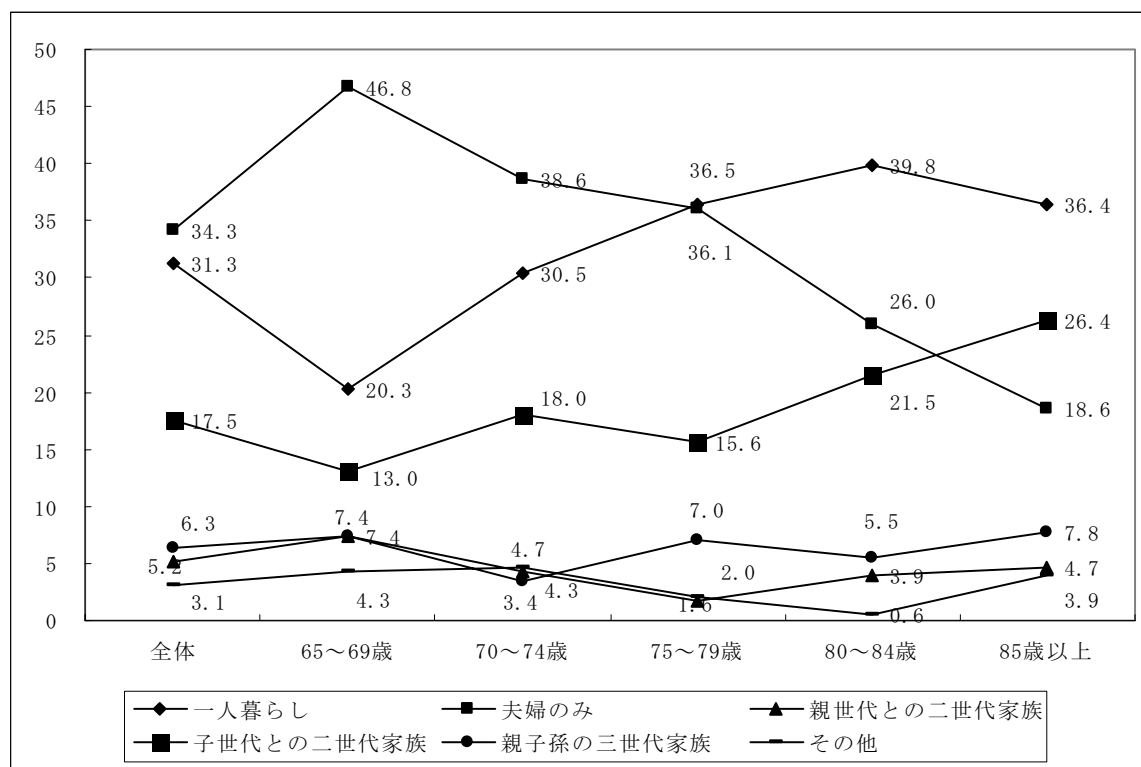
居住年数	1～4 年	5～9 年	10～14 年	15～19 年	20 年以上	無回答
一人暮らし	2	12	17	5	255	38
	0.6	3.6	5.2	1.5	77.5	11.6
夫婦のみ	4	6	12	13	300	25
	1.1	1.7	3.3	3.6	83.3	6.9
同居世帯	10	7	18	11	277	15
	3.0	2.1	5.3	3.3	82.0	4.4

斜面階段の多少	多い	普通	無回答	自家用車所有	所有	所有せず	家族所有	無回答
一人暮らし	194	92	43	一人暮らし	45	259	17	8
	59.0	28.0	13.1		13.7	78.7	5.2	2.4
夫婦のみ	248	80	32	夫婦のみ	180	139	33	8
	68.9	22.2	8.9		50.0	38.6	9.2	2.2
同居世帯	227	75	36	同居世帯	124	70	144	—
	67.2	22.2	10.7		36.7	20.7	42.6	—

I 年齢区分で見る世帯構成の変化

世帯構成別の基本属性を表2に示したが、年区分別に見た場合の世帯構成の変化を図1は示している。

図1 年齢区分別世帯構成の変化



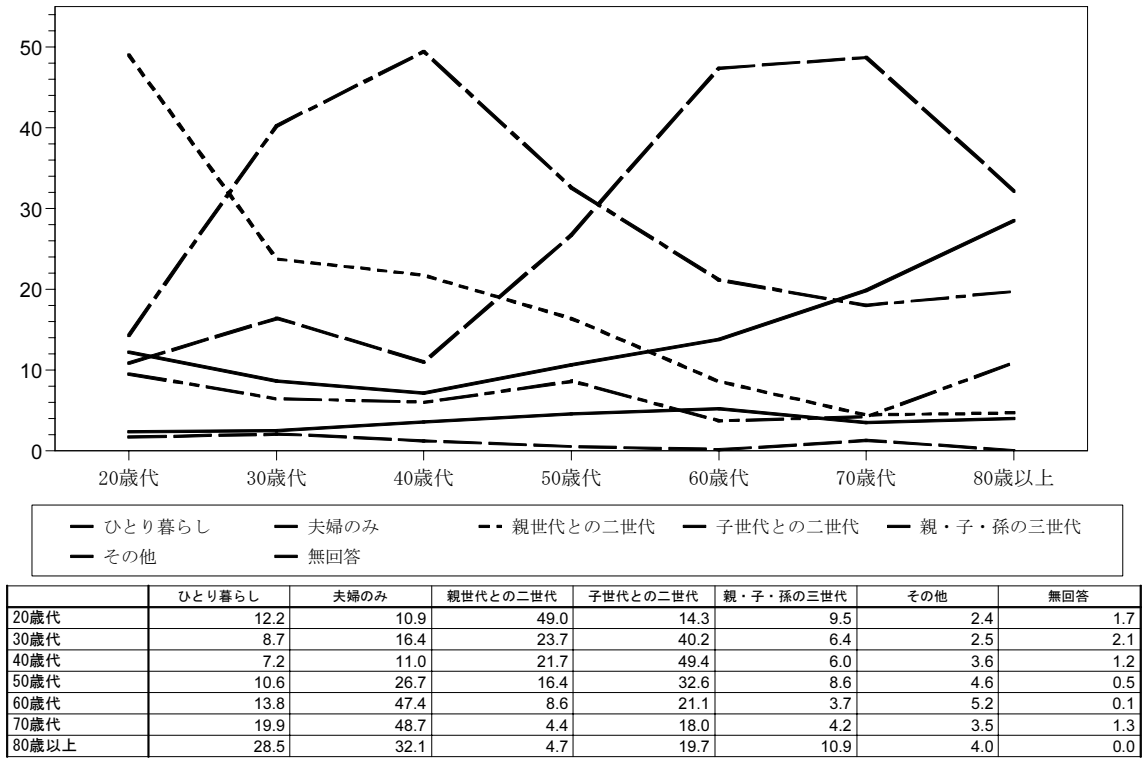
これによると同年代で世帯構成を比較すると、65～69歳、70～74歳では「夫婦のみ」が最も多いが70～74歳では減少する。75～79歳では「一人暮らし」が多くを占めるようになり「夫婦のみ」と同水準で最も多くなる。80～84歳、85歳以上では「一人暮らし」が最も多くなるが、85歳以上では減少し、80歳以上で「子世代との二世世代家族」が増加する。「親世代との二世世代家族」や「親・子・孫世代との三世世代家族」は変化がない。このように同居世帯でも「子世代との二世世代家族」が変化しているのは、年齢が高くなることで一人暮らしが難しくなる、一人暮らしになる等の理由で子世代と同居する人が増加するためと推測できる。

図2は20歳代から80歳以上までの世帯構成を折れ線グラフで示した。これによると、「一人暮らし」は50歳代以降から徐々に各世代ごとの世帯構成の多くを占めるようになり、80歳以上では最も多い「夫婦のみ」と同水準まで増加する。「夫婦のみ」は50歳代以降から急増するよう見えるほど各世代の最も多くを占めるようになるが、80歳以上では水準

が低下する。60 歳代を 80 歳以上まで最も多いのが「夫婦のみ」であるが、60 歳代、70 歳代を頂点に 80 歳以上では減少し「親・子・孫の三世代」が増加する。世代が高くなるに従い減少を続けるのは「親世代との二世代」であり、30 歳代～50 歳代で最も多く、40 歳代まで増加し、以降 70 歳代まで減少し続けるのは「子世代との二世代」である。

このように世代による世帯構成を推移として見ると、年代が高くなるに従い家族員が減少し、80 歳以上になると、子との同居が増える傾向を認めることができる。

図2 年代から見た世帯構成



北九州市保健福祉局「北九州市民の地域福祉に関する意識調査」2010 より作成

Ⅱ 生活上の困難や重要なこと

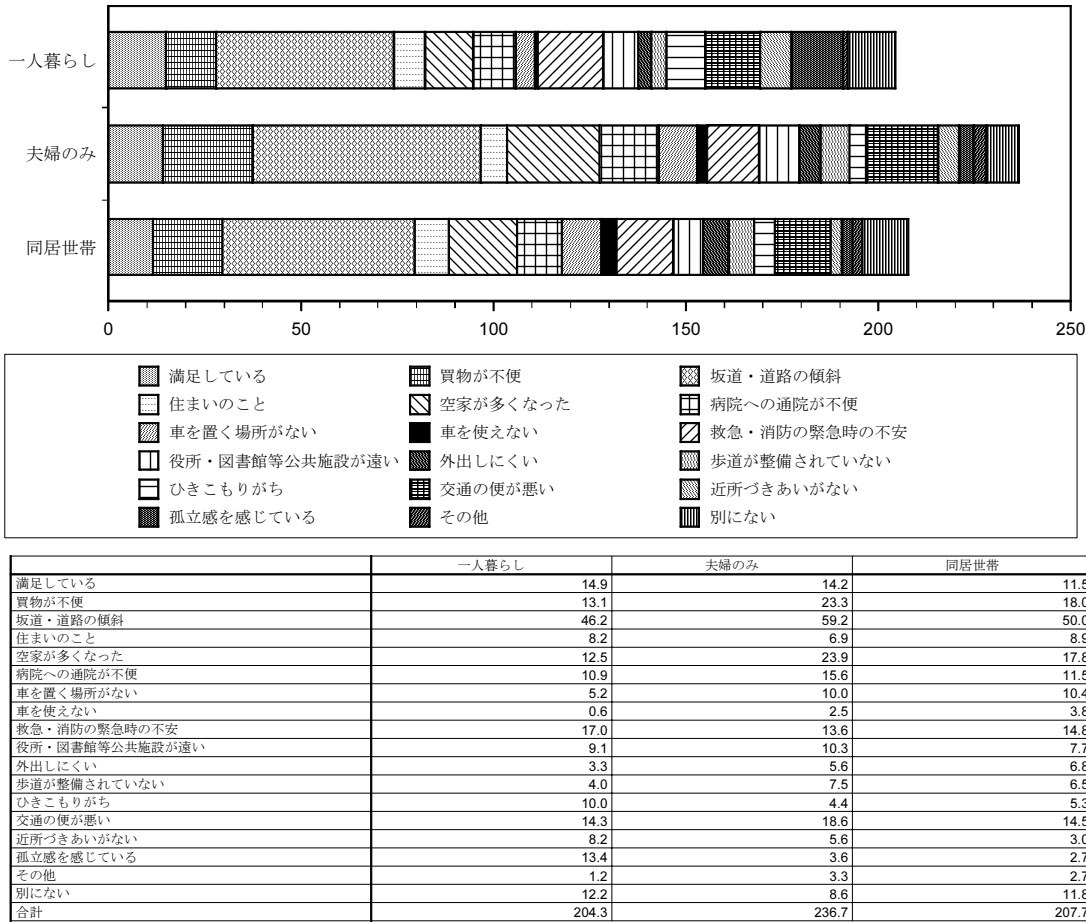
1 生活上の困りごとや悩み

上述の通り、一人暮らしは8割以上が女性で、自家用車の所有率も低く、6割近くが斜面や階段の多い地域で生活している。このような一人暮らしの生活上の困難について他の世帯と比較した。図3の集計表は縦集計で示している。

生活上で困っていることや気になること、悩みごとについては図3に示した通りである

が、「満足している」を比較すると、女性が8割を占め、自家用車の所有率も2割程度である一人暮らしの方が高く、同居世帯で低くなっている。同様に「買物が不便」と感じている人は夫婦のみが最も多く、一人暮らしが最も少ない。この傾向は「坂道や道路の傾斜がきつい」「住まいのこと」「病院への通院が不便」「自家用車(図中では車以下同様)を使えない」「交通の便が悪い」等に共通して認められる。この結果は生活上の困りごとや悩みごとを感じている割合は、一人暮らしの方が少なく、満足度が高いことを示唆している。

図3 生活上の困りごと



各世帯に共通して困りごとや悩みごととして多いのは「坂道や道路の傾斜がきつい」であり、一人暮らし、同居世帯の約5割、同居世帯では約6割の人が回答している。次いで共通して多い困りごとや悩みごとは、「買物が不便」「空き家がなくなった」「交通の便が悪い」「救急・消防等の緊急時が不安」「病院への通院が不便」等が多い方であるが、「坂道や道路の傾斜がきつい」に比べると2割に満たない程度である。

一人暮らしが唯一最も多い困りごとや気になること、悩みごとは「救急・消防等の緊急時が不安」である。また、社会関係としては「孤立感を感じている」「近所づきあいがいい」

「ひきこもりがち」でも一人暮らしが他の世帯よりも多い傾向が認められる。

このことから、満足度は一人暮らしの方が高く、生活上の困りごとや悩みごと一人暮らしは少ないが、緊急時に不安があり、近所づきあい等の社会関係が少ない傾向がある。

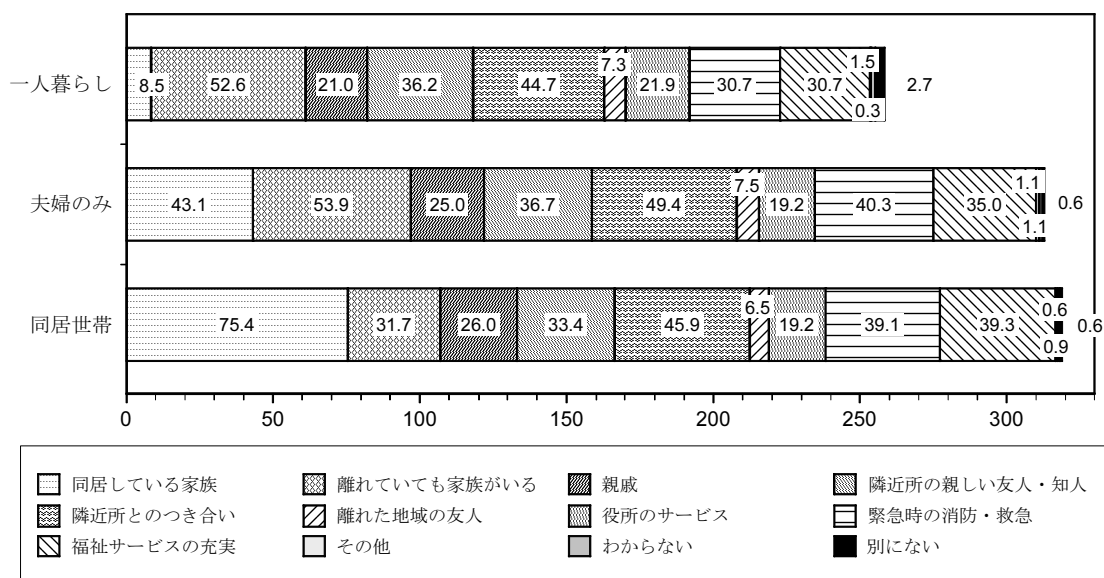
2 日常生活を安心して送るために重要なこと

生活の満足度が高く、生活上の困りごとや悩みごと少ないが、緊急時に不安があり、近所づきあい等の社会関係が少ない一人暮らしの人が日常生活を安心して送るために重要だと思っていることは、図4に示した通りである。

これによると、世帯構成により大きな違いは認められない。

各世帯構成に共通しているのは、生活上の安心のためには「家族」が重要と思っている人が多いことである。同居世帯は「同居している家族」を最も多くの人々が重要とし、一人暮らしと夫婦のみは「離れていても家族がいる」ことが安心の上で重要と思う人が最も多い。このように重要なのは家族と思っている人が多いのであるが、次に多いのは「隣近所とのつき合い」「隣近所の親しい友人・知人」である。しかも、この両者ともに各世帯ともに約8割からそれ以上を示し、「親戚」を上回り「家族」に迫っている。特に「隣近所とのつき合い」は「隣近所の親しい友人・知人」よりも重要と捉えられている。

図4 生活上の重要なこと



家族、隣近所とのつき合いに近い水準で重要と捉えているのは「緊急時の消防・救急」「福祉サービスの充実」である。

このように高齢者には、日常生活を安心して送るために重要だと捉えている三つの重要な要素がある。一つは家族・親戚、一つは近所の人とのつき合いや近所の親しい友人・知

人、そして緊急時の救急・消防と福祉サービスである。これらに関しては一人暮らしや夫婦のみ、同居世帯等の世帯構成には関わりなく、共通して重要と捉えられている。次では、この中から「近所の人とのつき合い方」や「相互の支援の有無」について社会関係として検討した。

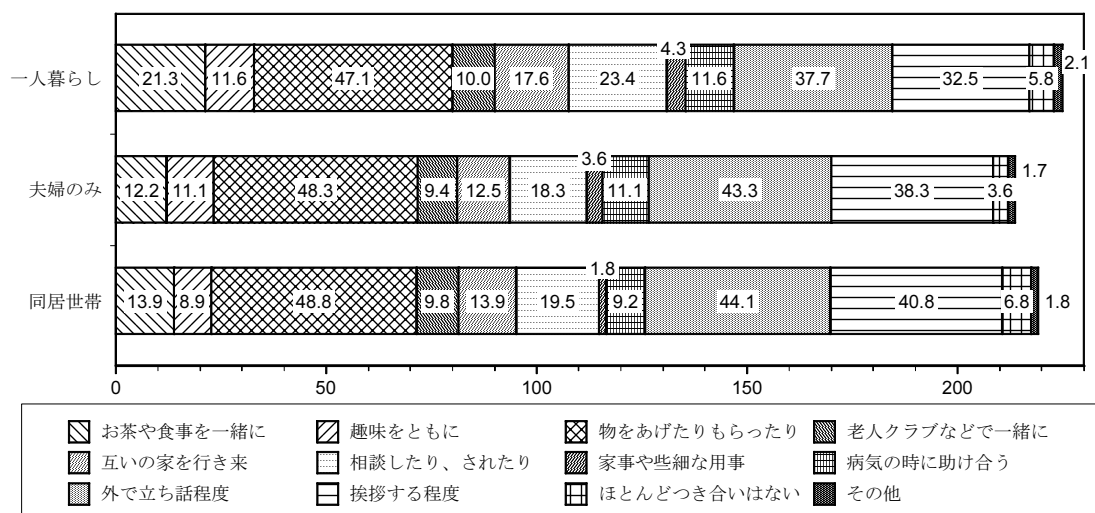
Ⅲ 近所の人とのつき合いと友人数

上述した通り、高齢者が日常生活を安心して送るために重要と捉えている一つに近所の人とのつき合いがある。ここでは社会関係として、近所の人とのつきあい方と友人数、近所の人との相互支援の必要性及び、相互支援の有無について世帯構成から検討する。図9の集計表は縦集計で示している。

1 近所の人とのつき合い方

世帯構成から見ると、図5に示した通り、世帯構成による大きな違いは認められない。その中で一人暮らしは他の世帯と比べて、「お茶や食事を一緒にする」(21.3%)、「相談したり、されたりする」(23.4%)、「互いの家を行き来する」(17.6%)が多く、「外で立ち話程度」(32.5%)は少ない。同居世帯が「病気の時に助け合う」(9.2%)や「家事や些細な用事をする」(1.8%)が少ないのは家族がいるためと推測できるが、一人暮らしや夫婦のみもそのようなつき合いが多いわけではない。

図5 近所の人とのつき合い方



このような結果から、一人暮らしが閉じこもりがちであるとか蟄居状態であるとは言えず、むしろ、立ち話程度のつき合いという会話は多いが浅いつき合いよりも、「お茶や食事

を一緒にする」「相談したり、されたりする」「互いの家を行き来する」等の親密な付き合いの相手が近所に存在することが分かる。「物をあげたりもらったりする」はどの世帯にも共通して多いが、「お茶や食事を一緒にする」に比べて親密な付き合いとは言い難い。

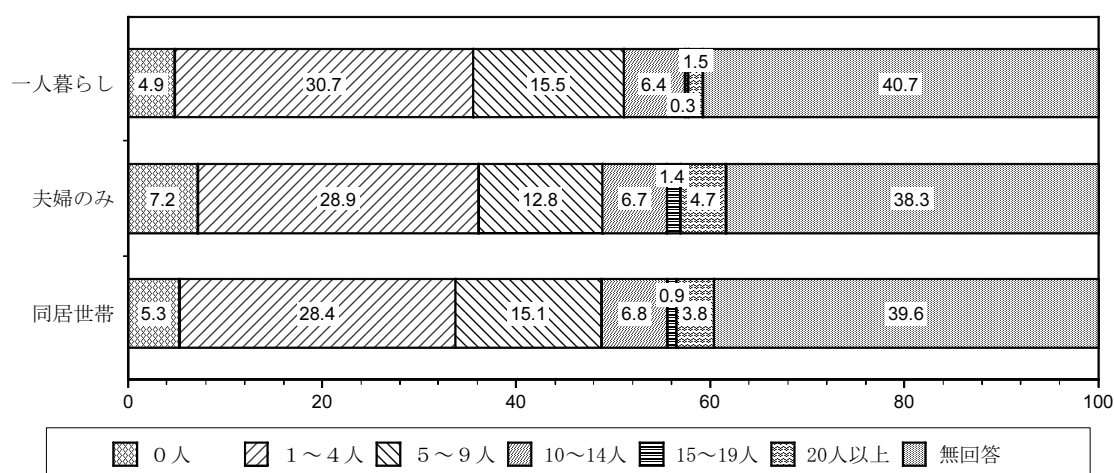
2 友人数

高齢者が日常生活を安心して送るために重視しているのは近所の人との付き合いとともに隣近所の親しい友人・知人である。この友人について居住地域内友人数と居住地域外友人数を示したのが図6～7である。

(1) 居住地域内友人数

居住地域内友人数は世帯構成による大きな違いは認められない(図6)。どの世帯も友人数は「1～4」人程度が最も多く、次いで「5～9人」である。「0人」は一人暮らしの方がむしろ少ない。友人数に関しては地域外友人数ともに「無回答」が多かった。

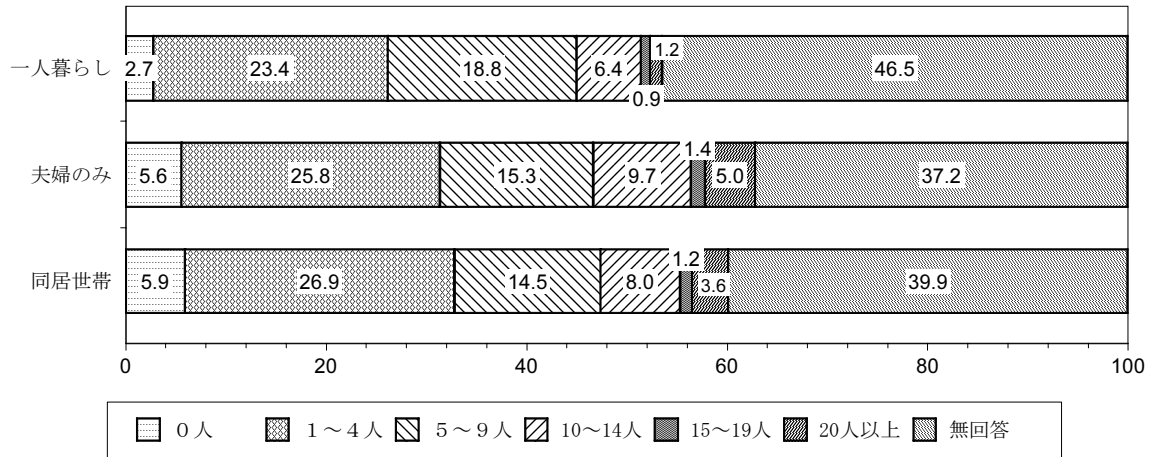
図6 居住地域内友人数



(2) 居住地域外友人数

居住地域外友人数は、一人暮らしが他の世帯に比べると「0人」は少なく、「5～9人」が多い(図7)。また、「20人以上」の中には100人という回答も含まれているが、これは一緒に活動等をしている仲間の数とも推測できることから、友人数と解釈できにくい数値である。このように世帯構成により、それほど大きな違いは認められないが、友人数でも一人暮らしの方が他の世帯よりも多いという傾向を認めることができる。居住地域外友人数も、どの世帯にも共通して「1～4」人程度が最も多く、次いで「5～9人」である。地域外友人数にも「無回答」が多かった。

図7 居住地域外友人数



3 近所の人との相互支援

日常生活で、重視される近所の人とのつき合いや親しい友人・仲間であるが、近所の人との相互支援を感じることもあるのか、感じるとすればその内容はどのようなことか。また、実際に近所の人にどのような手助けをした経験があるかについて以下の図8～9は示している。

(1) 近所の人との相互支援の必要性を感じる内容

近所の人との相互支援の必要性に関しては図8に示した。

図8 近所の人との相互支援の必要性を感じる内容

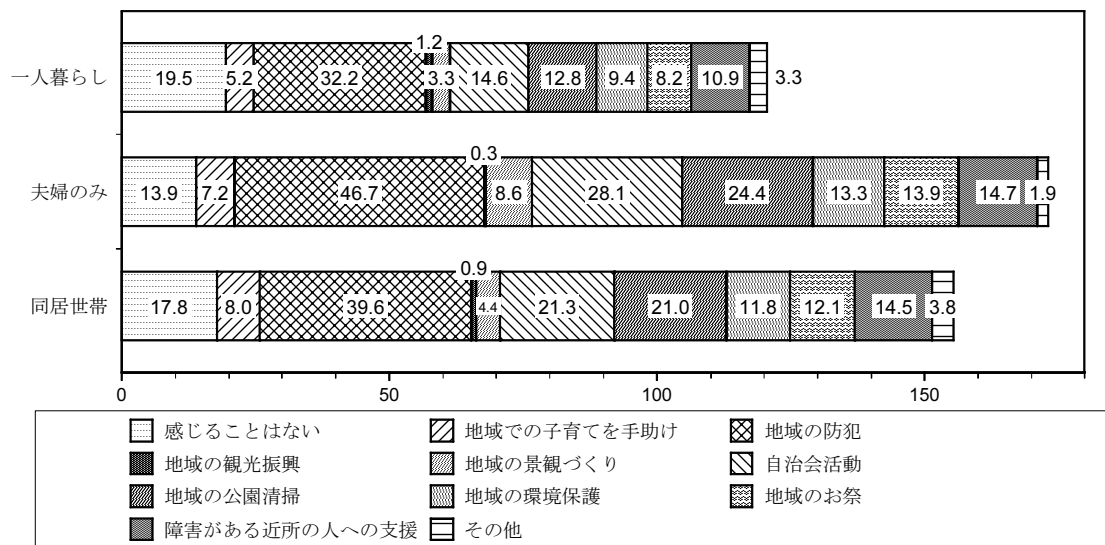
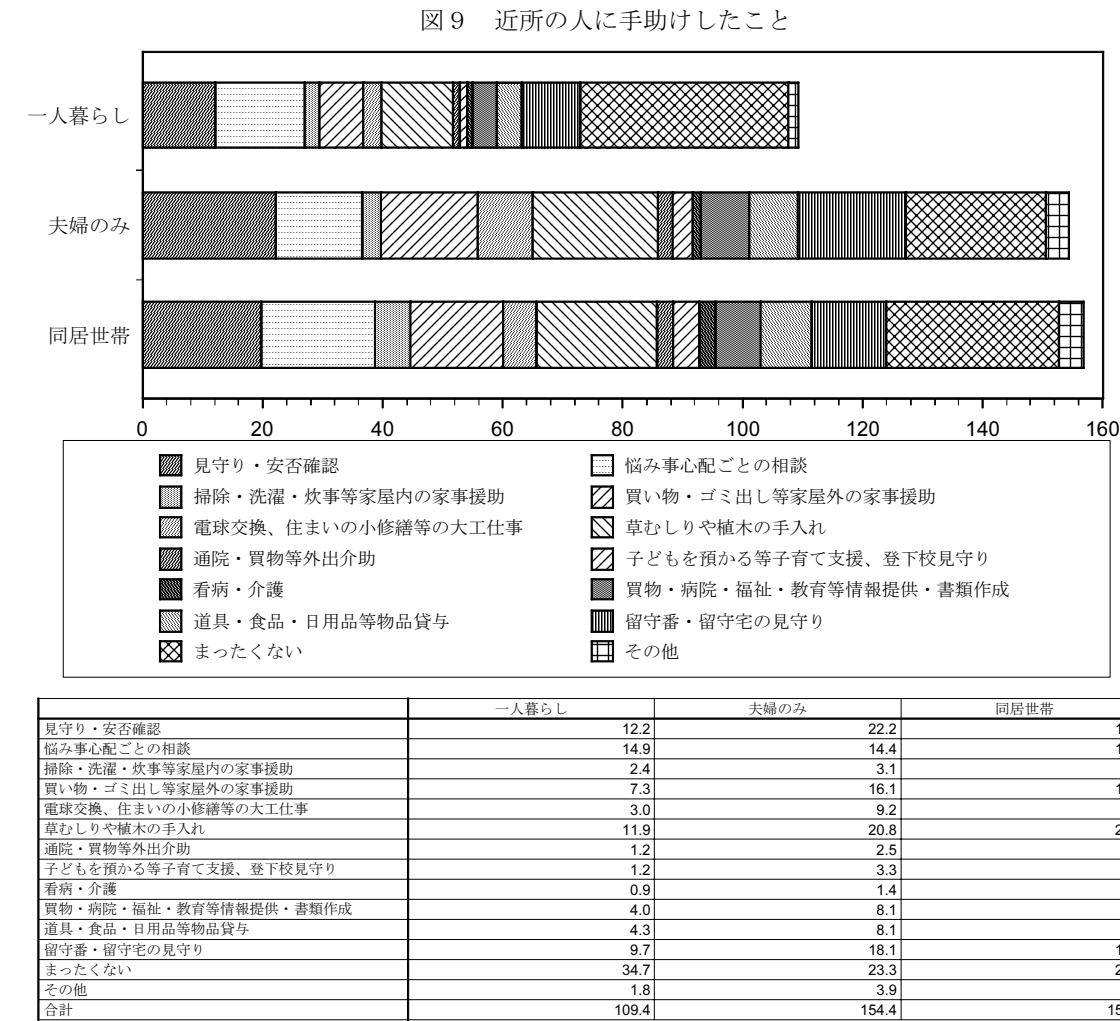


図8の通り、世帯構成で比較すると、一人暮らしは相互支援の必要性を「感じることはない」が多く、相互支援の必要性を感じる内容についても全体に少ない。相互支援の必要をより多く感じているのは夫婦のみであり、「地域の防犯」や「自治会活動」「地域の公園清掃」等が夫婦のみで特に多く必要性を感じている内容である。これら三者に関しては一人暮らしも同居世帯も同様に多くの人が必要性を感じているが、夫婦のみほどではない。また、「地域のお祭」や「障害がある近所の人への支援」も、夫婦のみや同居世帯では必要性を感じている人が多い。

このように一人暮らしは、「地域の防犯」を除き、他の世帯と比較して地域の人との相互支援の必要性を感じている人は少ないようである。

(2) 近所の人への実際の支援内容

図9は実際に行った近所の人への手助けの内容を示している。



上述した通り、このような支援は必要とする人の存在で成立するために、社会関係としては近所の人や友人とのつき合いとは別の事象として起こることになる。そのため、手助けの多少がその親密さや活発さと関連しているとは言えない。また、この図は近所の人への手助けを「した・しない」を示しており、回数ではない。

実際に行った手助けを世帯構成で比較すると、一人暮らしは「まったくない」が多いことから、近似の人への手助けは少ないことが分かる。

最も多くなされている「見守り・安否確認」「買物・ゴミだし等家屋外の家事援助」「草むしりや植木の手入れ」等は他の世帯に比べて少ない。また、夫婦のみに多い「留守番・留守宅の見守り」も少ない。

このように、一人暮らしは他の世帯に比べて、近所の人との相互支援の必要性を感じている人が少ないことと、実際に手助けする機会が少ないことが分かる。手助けを受けることに関しては不明であるが、「見守り・安否確認」「買物・ゴミだし等家屋外の家事援助」「草むしりや植木の手入れ」等は社会福祉協議会が実施している小地域福祉活動の福祉協力員調査(村山、2009)に示されている通り、見守りの対象は主として一人暮らしや夫婦のみ世帯であり、助け合い活動は話し相手に次いでゴミだしが多い等は、高齢者の一人暮らしを支援の対象者と見なす場合が多いことによるのかも知れない。

しかし、このように支援の対象と見なされる一人暮らし高齢者自身は近所の人との相互の手助けの必要性を、夫婦のみや同居世帯に比べてあまり感じていないという結果である。

IV 家族との関係と参加団体

高齢者のみならず多くの人は、困りごと、相談ごと、世話や介護、緊急時等のあらゆる場面で家族を中心に位置づけている。しかし、家族との関係に大変不満を持っている人で、困ったときの手助けを受けられると回答した人は世帯構成の違いにかかわらず皆無であった。このことから関係性により支援や手助けは変化すると推測できるが、以下では、困ったときに家族の支援を受けられるか、家族の住まいとの距離はどの位か、さらに社会との関わりとして自治会・町内会活動や行事への参加や参加している団体について世帯構成により比較し、その違いを見る。

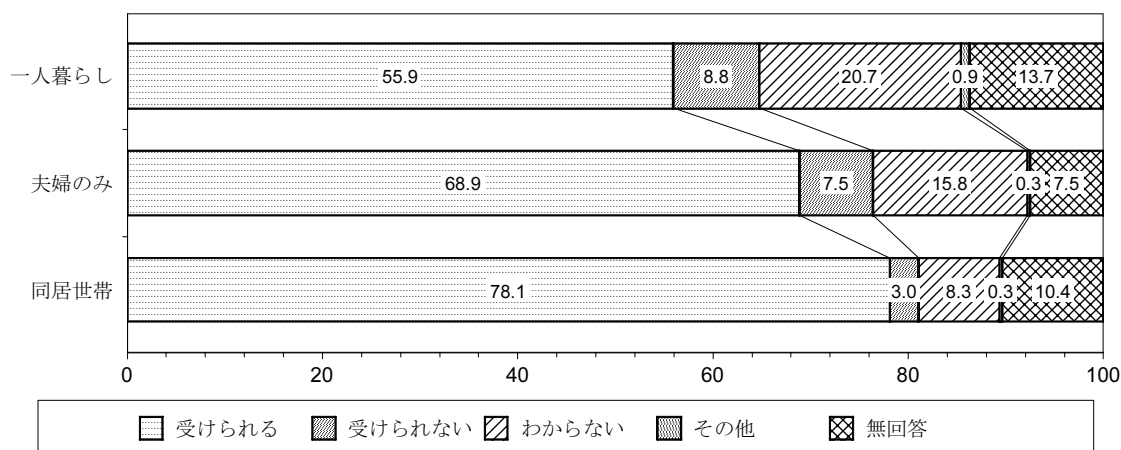
1 家族との関係

(1) 困ったときの家族の支援

図 10 には、困った時に家族や親族の手助けを受けられるかを質問した結果を示した。これによると一人暮らし、夫婦のみ、同居世帯の順で「受けられる」が増加する。一人暮らしの2割は「わからない」と回答しているが、1割近くは「受けられない」と回答している。「受けられない」に関しては夫婦のみや同居世帯に比べて多く、「わからない」も同

様である。しかし、同居世帯にも「受けられない」は存在する。

図10 困った時の家族・親族の手助け

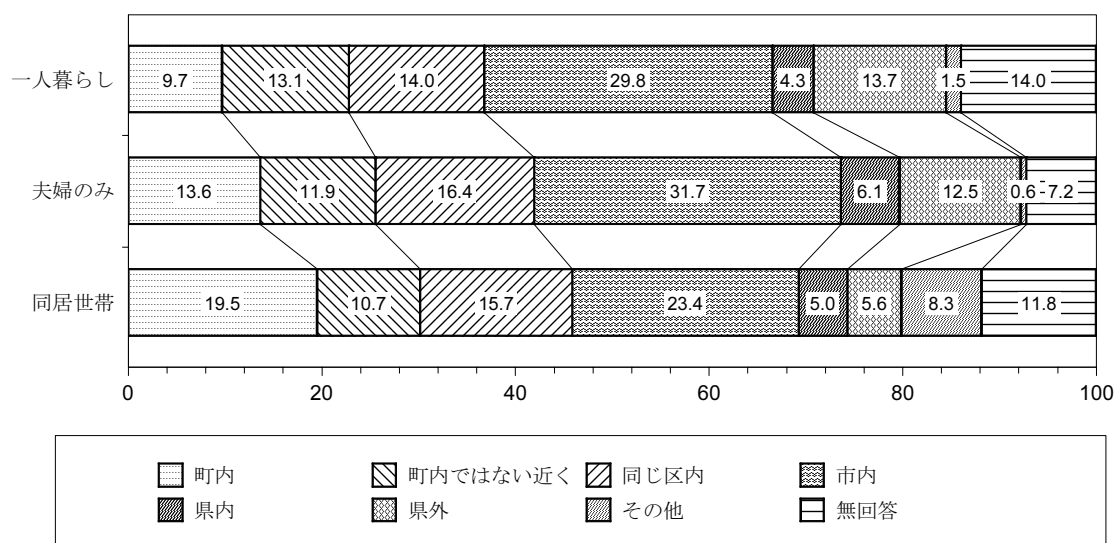


(2) 家族との距離

困ったときに家族や親族の手助けが受けられないのは、住まいとの距離に関わりがあるようである。一人暮らしで見ると「町内でない近く」「同じ区内」「市内」は他の世帯と変わりはないが「同じ町内」が少なく、「県外」が多い(夫婦のみと同水準であるが)。

一人暮らしが手助けを受けられるとの回答が他の世帯に比べ少ないのは、このような距離が影響しているのかも知れない。

図11 最も近い家族・親族の住まい



2 活動への参加

(1) 自治会・町内会活動への参加

近隣との社会関係に関して、自治会・町内会活動への参加をしてみる。図12から、「楽しんで参加している」に関しては世帯構成により違いはない。しかし、一人暮らしは「役員や当番で参加」が少なく、「参加していない」が同居世帯同様多い。この図からは夫婦のみが「役員や当番で参加」が多く、「参加していない」が少ないなど、自治会活動への参加が多いことが分かる。図13には地域活動の役員について示しているが、これからも夫婦のみが自治会役員等をよく担っていることが分かる。逆に一人暮らしは「特になし」が多く、役員が全体的に少ない。

図12 自治会活動への参加

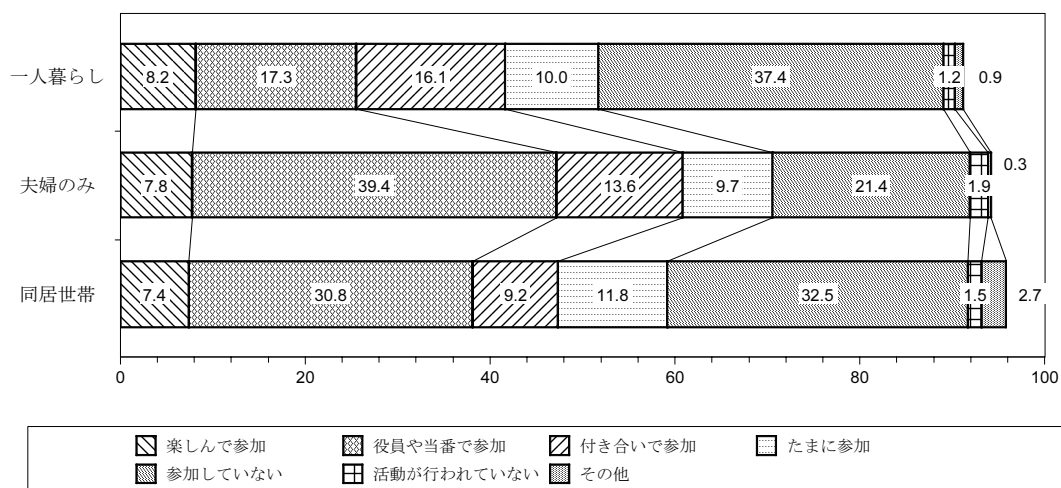
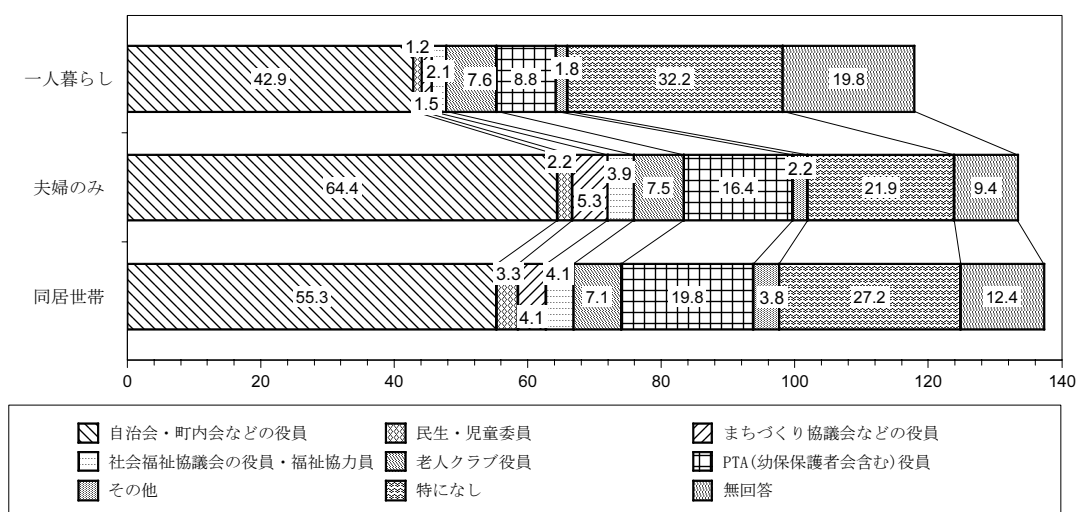


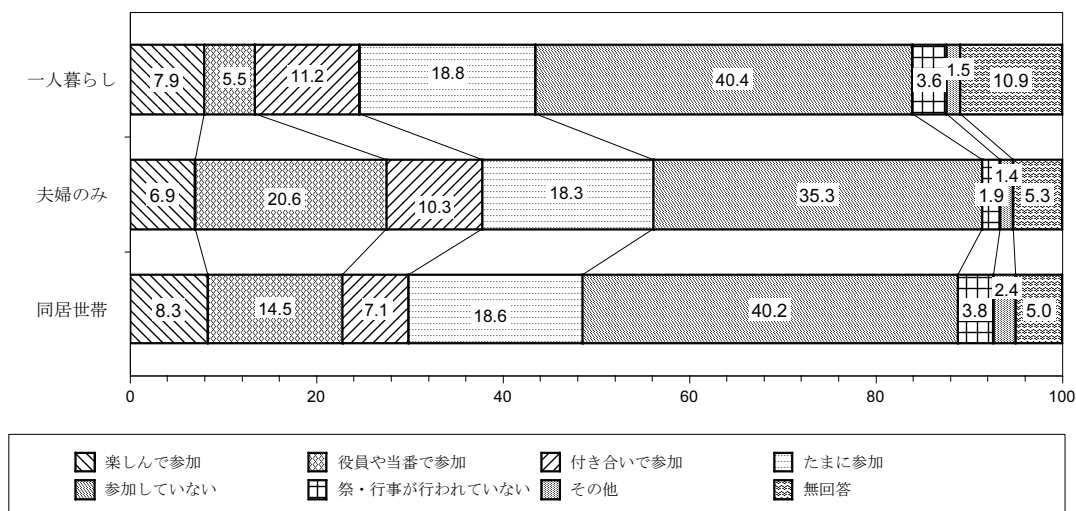
図13 携わった地域活動の役員



(2) 地域の行事や祭りへの参加

地域の行事や祭への参加に関しても、夫婦のみが多く一人暮らしは少ない。同居世帯も「役員や当番で参加」は一人暮らしより多いが、参加という点では一人暮らし同水準である。地域の行事や祭には、概ね5割以上が参加していない(図14)。

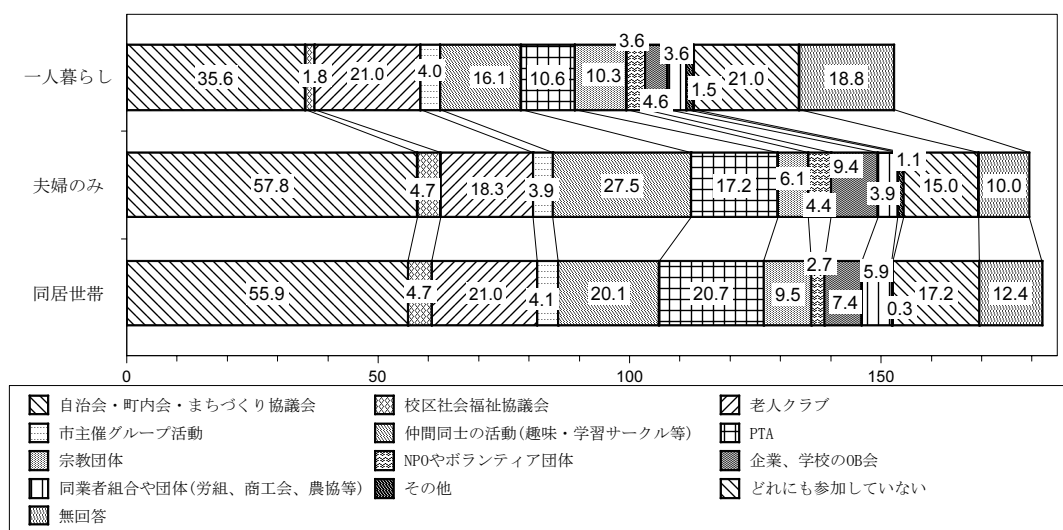
図14 地域の行事や祭への参加



(4) 参加経験のある団体

一人暮らしは「自治会・町内会・まちづくり協議会」への参加が少ないが、その他でも、女性が多くを占めることから「企業・学校のOB会」「同業者組合や団体」を除き、「仲間同士の活動」等を含め全体に低調である(図15)。

図15 現在・過去に参加したことのある団体



IV 仮説の検討と今後の課題

1 仮説に基づく検討

以上が 09 年度に行った高齢者の調査結果の中から、一人暮らしに着目して、社会関係に関する部分を抜き出して整理した結果である。

仮説は、一人暮らしは夫婦のみや同居世帯に比べて、①日常生活上の不便等の問題が多い、②閉じこもりがちで社会関係が少ない、③団体活動への参加が少ない、④家族との関係が密である、である。

①の仮説、日常生活上の不便等の問題が多いに関しては、困りごと、気になること、悩みは夫婦のみが多く、一人暮らしは同居世帯よりも満足度が高く、買物や通院等や外出に不便を感じている人も少なく、仮説は当てはまらない。一人暮らしの気になること、悩みごとは「救急・消防等の緊急時が不安」である。しかし、社会関係になると、一人暮らしの方が他の世帯よりも「孤立感を感じている」「近所づきあいがない」「ひきこもりがち」と感じている人が多い。

②の仮説、閉じこもりがちで社会関係が少ないに関しては、上記の通り、一人暮らしの方が他の世帯よりも「孤立感を感じている」「近所づきあいがない」「ひきこもりがち」と感じている人が多い。これは感じていることであり、既に図 5 で示した通り、一人暮らしは他の世帯と比べて「お茶や食事を一緒にする」「相談したり、されたりする」「互いの家を行き来する」が多く、「外で立ち話程度」は少ない。「あいさつ程度」「外で立ち話し」や「物のやりとり」は浅い関係を示唆し、「趣味」「家の行き来」「相談事」は親密度が高いつき合いである。このことから、一人暮らしは近所の人と親密なつき合いがなされていることを示している。

この結果からは、「孤立感を感じている」「近所づきあいがない」「ひきこもりがち」は感じているだけであり、表 3 の通り、外出の頻度か他の世帯より少ないわけではない。このように仮説とした閉じこもりがちで社会関係が少ないは当てはまらない。

③の仮説、団体活動への参加が少ないについては、自治会・町内会活動及びその役員や地域の行事や祭への参加が少ないことから、この仮説が当てはまると考えられる。

④の仮説、家族との関係が密であるについては、一人暮らしは困ったときや緊急時に家族の手助けが得られない人が多く、遠方に家族が居住する等の条件もあり、他の世帯と比べて密とはいえなかった。

以上が仮説に基づいて検討した結果である。これらの社会関係は生活の質の確保という視点からも重要な条件である。

表3 外出の頻度

	毎日	週に2 ～3回	週に1 回程度	月に2～ 3回程度	月に1回 程度	ほとんど しない	まったく しない	その他
全体	362	409	96	28	6	24	7	16
	35.2	39.8	9.3	2.7	0.6	2.3	0.7	1.6
一人暮らし	97	140	36	8	3	5	1	6
	29.5	42.6	10.9	2.4	0.9	1.5	0.3	1.8
夫婦のみ	142	157	30	6	—	3	2	3
	39.4	43.6	8.3	1.7	—	0.8	0.6	0.8
同居世帯	123	112	30	14	3	16	4	7
	36.4	33.1	8.9	4.1	0.9	4.7	1.2	2.1

2 孤独と今後の課題

上述の一人暮らし高齢者が「孤立感を感じている」と回答したのは、独居(living alone)が大きな要因であろう。西欧社会では孤独という「ひとりぼっちで身寄りのない人の状態」を指す言葉として Solitude を一般的に用いる(山口、1984: 96)ようであるが、日本の場合は孤独と孤独感を混同して使用することもある。

J. タンストール(1978: 44-45)は孤独(alone)の諸形態として次の様に示し、説明している。その諸形態は独居(living alone)、社会的孤立(social isolation)、孤独不安(loneliness)、アノミー(anomie)である。その説明によると、「独居」は定期的に子どもと会える人は好む。「社会的孤立」は独居と密接に関連があるが、独居の高齢者全てが孤立化するとは限らず、身体的障害度や住居の移動とは関連が薄く、孤立化と友人、隣人あるいは社会参加との間にあまり関連性はみられない。「孤独不安」と社会的孤立とは関連性があるが少数派である。あまり交流のない子どもをもつ独居高齢者は孤独不安に陥る危険性をもつが、孤独不安は特定の対象と結びついた形で感じられ、夜と冬が厳しい。「アノミー」は社会参加の欠落したグループと関連性がある。女性よりも男性の方が多い(定年退職がきっかけになったりする)。

また、孤独の概念はしばしば曖昧な定義で使われる用語であり、単純いえば、孤独は如何に個人がもつ社会的ネットワークや、社会との交流・関与を評価するかに関係し、個人の望みと現実との差がある状態を示す相対的概念である。これは単独(being alone)、独居(living alone)、社会的孤立(social isolation)と区別すべきである(ヴィクター、2009: 108)という指摘もある。

J. タンストールのこのような説明からは一人暮らし高齢者が「孤立感を感じている」のは孤独不安に近いと推測できる。孤独不安が特定の対象と結びついているのであれば、近

所の人や友人との交流が頻繁であっても解消されない可能性がある。また、一人暮らし高齢者は近所の人や友人との交流はあるが、地域の活動への参加が少ないという上記の調査結果から見えるのは社会的孤立の危惧である。多くの場合、知人・友人や近所の人と交流があれば、社会的孤立は否定されがちであるが、社会的孤立は身体的障害度や住居の移動とは関連が薄く、孤立化と友人、隣人あるいは社会参加との間にあまり関連性はみられないという示唆によると、社会的孤立に関しては知人・友人や近所の人と交流があるだけでは否定できず、重要な他者の存在とその関係を捉える必要がある。知人・友人や近所の人と交流だけでは捉えられない高齢者の孤独不安と社会的孤立の2点を今後の課題とする必要がある。

3 日常生活の質の確保に関する今後の課題

この調査は年齢の上限を設けなかったことで、最高齢は90歳を超える。E. H. エリクソン (E. H. Erikson, 1982) は心理・社会的発達課題として8段階を設定したが、今日では90歳代、100歳以上の人々が増加している。このような85歳を超える高高齢者 (oldest old) には発達課題の第8段階では対応できないとして、J. M. エリクソン (J. M. Erikson, 1997) は第9段階を加えた。つまり、85歳前後以降の多くの人々は種々の多重障害を経験し、虚弱、罹患率、認知症有病率も増加し、社会的には配偶者との死別、病院への入院や施設への入所を経験する人が多い等、心身の状態や生活そのものへの適応が困難になる。心理的には満足感の低下や孤独を志向する傾向が強まる等、高高齢期には悲観的にならざるを得ない問題を抱えることになる。J. M. エリクソンは自己の心身の能力に加え社会的にも多くの喪失を経験する高高齢者には第8段階は当てはまらないとして、第9段階として第1段階で獲得したはずの「基本的信頼感」という他者の存在を前提とした課題を設定した。英国のグローイング・オールダー・プログラム (1999～2005) による高齢者から見た高齢者の生活の質が示されているが、このように第9段階や第4世代と位置づけられる高高齢者の生活の質の確保を今後、問い直す必要があるだろう。

【引用・参考文献】

- ウォーカー, A., ヘネシー, C. H. 編著／山田三知子訳『高齢期における生活の質の探求』ミネルヴァ書房、2009
- エリクソン, E. H., エリクソン, J. M. / 村瀬孝雄、近藤邦夫訳「ライフサイクル、その完結増補版」みすず書房、2001、162～165
- 瀧本孝雄、鈴木乙史編「近隣社会の人間関係」(島田一男監修『講座人間関係の心理 5』) プレイン出版、1988
- タンストール, J. / 光信隆夫訳「老いと孤独」垣内出版、1978、pp44～45
- ヴィクター, C. R., スカンプラー, S. J. 他「高齢期の孤独」(ウォーカー, A., ヘネシー, C. H. 編著

／山田三知子訳『高齢期における生活の質の探求』)ミネルヴァ書房、2009、pp108～111
村山浩一郎「福祉協力員の小地域福祉活動調査まとめ」(地域づくり研究会『地域づくりに関
する調査研究報告書』)北九州市立大学都市政策研究所、2009、pp63～107
山口信治「孤独な老人」晃洋書房、1984、p96